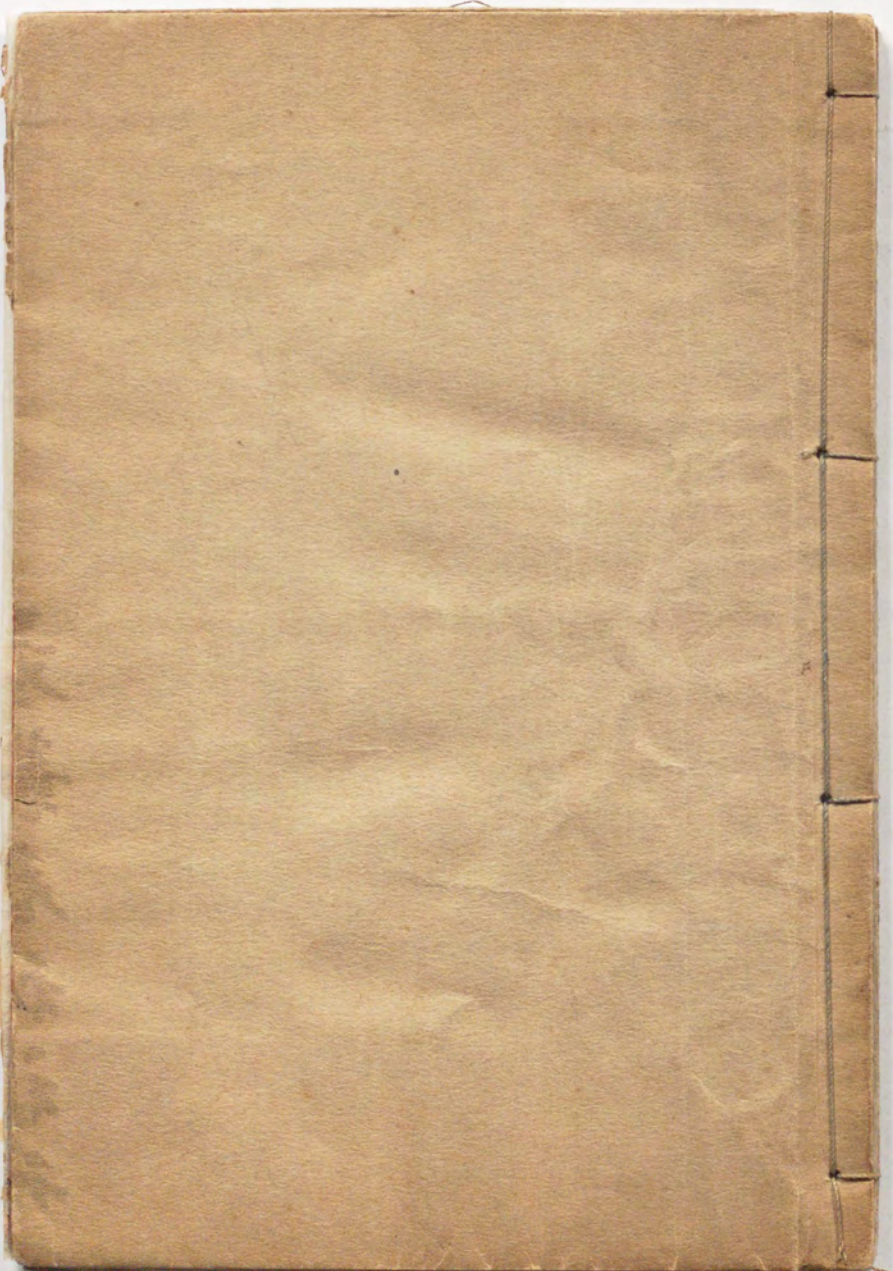






繪本和漢廿四序全





直江山城守

山本勘久

臣吳相兄
越閼弟



曾参孔子の弟子あり或時山
薪を取行たり跡母をたき
人未だ故りと思ふ心住
せむ由参早く返と指し山
通じとや

董永後漢の人
早く母を失ひ父を仕て孝
父死して葬るべき金ありしより
日頃雇はるる家小至り銭を父
其家の



頼同進して
主家へ至り月間
百疋の絹をかり其
借錢を償ひ我ハ天帝の織女あり
とて雲をのり去れしと云ふ

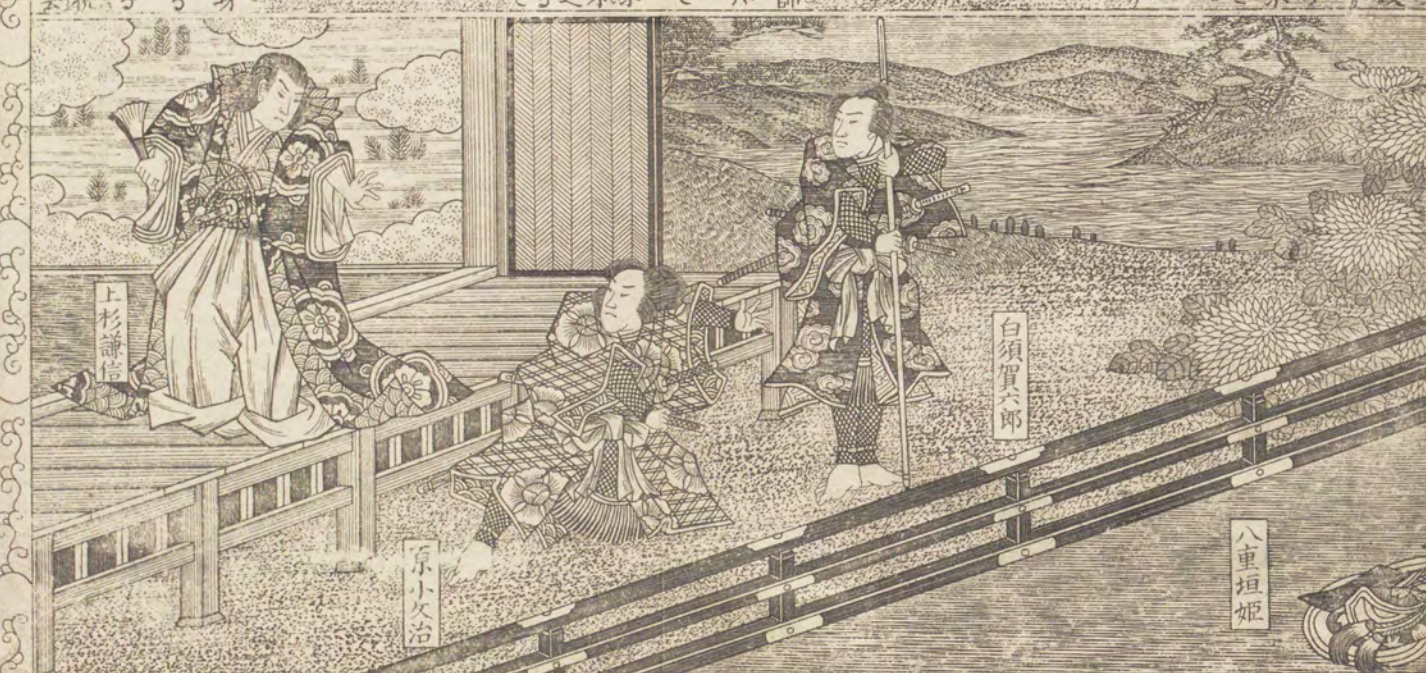
剡子年老たる父母の煩ひけるを因師
鹿の乳あらで癒ぐじと存れ
鹿の皮をきて山へ行鹿と交り乳を
求めんとする時人未り射しをる故に
右の次第

世の乱れ母を供ひ他国に行き其身
人の庇ひとありて母を養ひける
其後世治りて母を故郷に還り
時牛馬を以て駕するを自車と稱す



名佳之姿
香人現

妙濡衣



八重垣姫

白須賀六郎

京小久治

上杉謙信



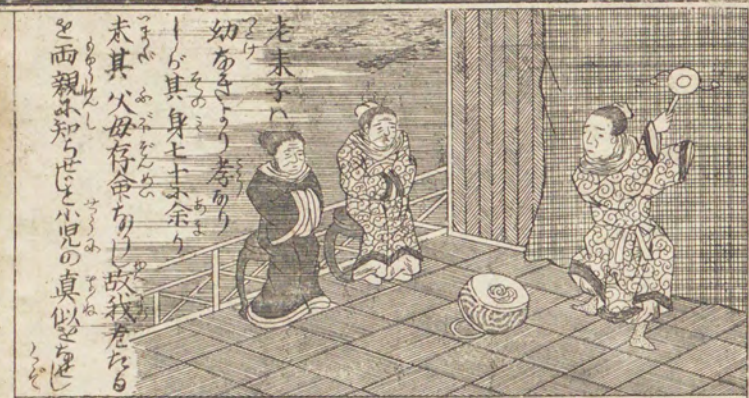
漢の文帝、御身天子の御位に
有る、御母病臥ぬ、時昼夜
衣冠とて、朝夕の食と
始め、藥に至る迄、自誠して進め



柳足利三代將軍の時
美濃の国稲葉山の城主
齋藤道三天下と大勢を
思ひ立、佐々種、鳥、ア、

三好五郎義綱

種、鳥、ア、道三



老末子
幼あき、う、考あり
い、其身七、金、
未、其、父母存命、故、我、を、
と、西、親、み、知、ら、せ、と、小、児、の、真、似、を、



足利義輝公

松永弾正久秀





武田勝頼ハ簗作
茲又甲別ハ花形の
館主武田入道信玄
の老臣云者
刑部と云者
ありが表ハ毎三の忠臣
あての内の主家とハ押
領あさんと云いあるいと
憎むべき倭人ありーが
兼て我子ハ簗作とて



時より入る置りあも
成して主家とハ我子ハ
入れんと思ふうち取
久置ー我子の勝
頼切腹せー
ハ刑部の
為き今迄
工じ度迄も
皆頭とれー
其上取ありし
簗作の勝頼の
ため討れ
ーハ思の



主君の公達勝頼
同じ生れを幸ひ幼き
武田信玄



八重垣姫
白報ひと知りぬける
あれとも信玄其妻
と深くも隠
とて近も簗作と
ーハ上杉の間者

陸續ハ幼きて
孝なり或曰他家
より我懷より橘の
実を落せしか主人是を愛や
しと尋し不其父橘の実を
ぬべ取て持てりとは言ふとや

信女



工をい入れおけり
 爰ふまゝと主君の
 思ひ我子へ
 捨つるなりぬ
 片乳房親
 の名をえ
 明記と捨
 なる思ひ
 ろひ取乳を抱
 へんものありと云
 の大夫膝すひたが
 ひみ我子へと云

摩太八母^{ママ}はて
 至孝^{しこう}あり身^みい
 幼^こ児^わあれど
 以^もて念^{ねん}とせど老^{ろう}母^ぼ
 常^{じょう}く乳^{ちち}と好^{この}め我^{われ}児^こは
 与^あべと老^{ろう}母^ぼあたとを

元よりしらぬ児なる
 勝手小せとも
 挨拶小門足切気大
 さ小思ひのどもく凌ひ磨綴
 拾ひ其児を門小置て
 を帰ける
 跡部刑部

跡部刑部

果し多く遂小高坂保

伏せ奉唐綾
小抱をて衣
へそいふ
そも此兒の
父名を軍
師頼
ちん



王祥、晋の世の人あり、繼母を使へて
孝なり、或とき母の生魚を食せんと
云けるが頃しも、寒中ぞ、江氷
氷張つるけ、其身赤裸なり、成り
氷の上か卧けれ、氷解て鯉を得
こゝろと云ふ



横藏、山本勘助
爰小百姓横藏慈
悲藏と云ふ兄弟
あじが兄ハ免角
小葉と云ふ
一人の老母ハ
我まゝあれど



郭巨、後漢の人あり、家貧
し、老母と入の小兒ありて
免角老母の孝、小兒を食せんと
夫婦相談の上、兒を土中へ埋んと
せしを掘し、小金を掘出、母を養



慈悲藏、直江山城

△弟の慈悲藏
いと孝心
く母を仕
る或日、雪
と降り、日
と求めんと
や、不至り
掘けれハ

揚子如きより孝心深く武に父
 と共山へ行けるふふなる虎出て
 父を喰さんとに揚子驚き虎の
 首筋小とり付我を喰て父を助け
 哭きければ猛き獣も感ぜて逃去り



直江山城守

揚子如きより孝心深く武に父
 と共山へ行けるふふなる虎出て
 父を喰さんとに揚子驚き虎の
 首筋小とり付我を喰て父を助け
 哭きければ猛き獣も感ぜて逃去り



山本勘助



後も名ふや越後ある上秋
 謙信公の奥座敷間毎日を
 金襴あけて八丈と云れ
 ねと夫と頼勝頼を余日
 成と八重垣悪くも其
 の画像の前ふらるる香の
 煙りも空たき
 磨此世ふ
 益ささよ
 名魚ハある
 一のありと
 聞くせめて
 言ひやの
 御声を聞せておるれ



善詩母不仕へて
 至孝あり其妻龐氏又よく姑
 仕ふ其母常々江の水を好む妻
 水と汲来りて母お供一日風お
 さへられて妻時おらね母渴
 き妻と去ら夫婦の孝庭お泉

おお心の下助お泣つ
 口説つある所へ行く
 共知れで八束の花
 作の装作上下
 姿の更姿ふ
 似たとら
 あろり

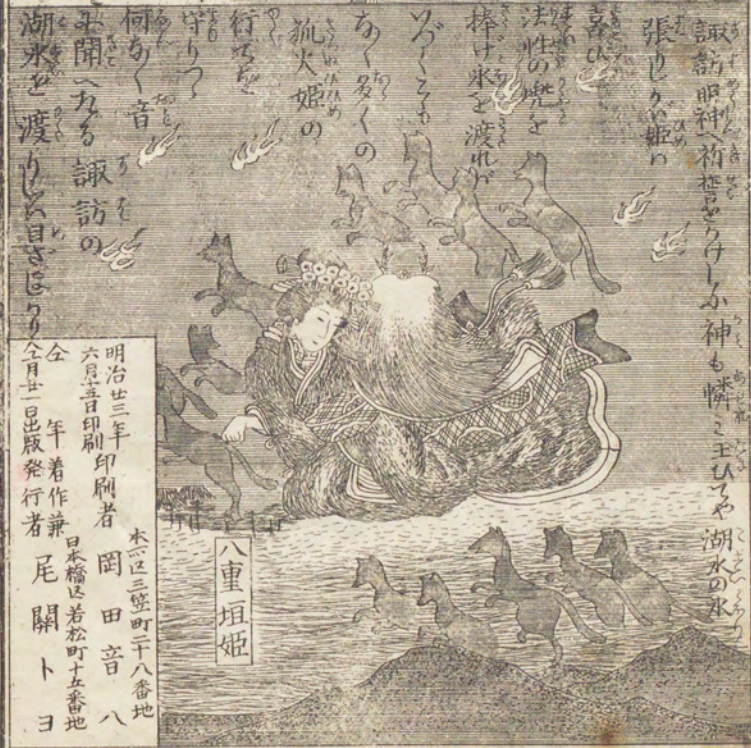
王親の母は侍と孝あり其母死に
後む存せり雷鳴と恐れけ
る故雷鳴もる毎ふ必慕とあへり

謙信
八重垣姫

其所へ参り
あつゝ立出る
謙信公の裏
作小塩尻迄行
急の使者小参
れとある小裏
作の畏り候と
直様状箱受
取て勇ん
でこそい

丁蘭は至孝の人なり
其父母死せし父父母の像を
彫刻して後堂置き食を備へ朝
夕出入せると是を并生はる如

花作裏作は勝頼
跡見送りて
謙信の家来と
なり云け
る今今
見識と世花作
裏作はさされも
あらぬ武田勝頼
半ひ水の解さる
跡見送りて討取れと下知皆く走行けり



黄庭堅八山谷道人といふ其身
天下の文総たる不依て官高
家富ける然も親不孝心深く
病み衣とらる薬もありて
進めろて召使ふ者の午を僅
自穢れたるもの迄掃除せと

諏訪神社初穂よりけしふ神も憐れまほしき湖水の水
張りくぬぬ
法性の光
捧け水と渡れ
あくあくの
狐火姫の
何れも音
平聞へなる諏訪の
湖水と渡りし目きじり

明治廿三年
六尾音印刷印刷者 岡田 音 八
全 年着作兼 尾 關 ト ヨ
全月廿一出版発行

八重垣姫





市川仲藏

市川仲藏

村瀬

